

兵庫県文化財調査報告20集

近畿自動車道関係 埋蔵文化財調査報告（1）

— 庄境 2 号墳 —

昭和58年3月

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本報告書は近畿自動車道舞鶴線建設に伴った調査のうち、昭和56年度に発掘調査を実施した多紀郡丹南町所在の庄境2号墳及び杉・西吹遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は日本道路公団の委託をうけ、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 本報告書に使用した標高は、日本道路公団が設定したBMを使用した。
4. 使用した写真は、遺構を調査員が撮影し、遺物は森 昭氏の手を煩わした。
5. 本書中の遺物の図面番号と図版番号は一致し、写真図版のみのものに100番台を使用した。
6. 本書の執筆は調査担当の輔老拓治・吉田昇の両名が行い、各文末に名を記した。
7. 引用文献及び参考文献は各文末に記したものもあるが、本書末に一括記した。

本文目次

I はじめに	
1. 調査の経過	1
2. 位置及び環境	3
II 庄境2号墳の調査	
1. 墳丘の構造	6
2. 外部施設	8
列石	
3. 内部主体の構造	10
石室	
石室内火葬墓	
4. 遺物	
遺物出土状態	13
土器	13
① 火葬墓の土器	
② 須恵器	
③ 七師器	
鉄器	20
5. 墳丘外の遺構	23
近世墓	
III 杉・西吹遺跡確認調査	
1. 杉地区	25
2. 西吹地区	
IV まとめ	29

挿 図 目 次

第1図	近舞線路線及び調査地	1
第2図	近舞線関係調査遺跡一覽(水上郡・多紀郡)	2
第3図	調査地遠景	3
第4図	周辺の遺跡	4
第5図	地形測量図(調査前)	6
第6図	墳丘北裾土層断面図	7
第7図	地形測量図(調査後)	7
第8図	石室・列石平面図	8
第9図	墳丘東列石立面図	9
第10図	石室実測図	11
第11図	火葬墓出土状況	12
第12図	火葬墓出土土器	14
第13図	出土土器実測図(1)	15
第14図	出土土器実測図(2)	17
第15図	出土土器実測図(3)	19
第16図	鉄器実測図(1)	21
第17図	鉄器実測図(2)	22
第18図	鉄器観察表	22
第19図	近世墓実測図	23
第20図	五輪塔実測図	24
第21図	杉遺跡坪設定図	25
第22図	杉遺跡土層断面図	26
第23図	西吹遺跡遠景	26
第24図	西吹遺跡 坪設定図	27

図 版 目 次

図版 1	(上) 庄境2号墳遠景(調査前)北より	30
	(下) 庄境2号墳遠景(調査前)南より	
図版 2	(上) 近世墓(調査前)	31
	(下) 近世墓(調査後)	
図版 3	(上) 石室(奥壁より)	32
	(下) 石室(築道部より)	
図版 4	(上) 床面遺物出土状況(中央部)	33
	(下) 床面遺物出土状況(奥壁右)	
図版 5	(上) 床面遺物出土状況(右側壁附近)	34
	(下) 床面遺物出土状況(閉塞石附近)	
図版 6	(上) 石室全景	35
	(下) 石室全景(石敷除去後)	
図版 7	(上) 列石(北東側)	36
	(下) 列石(北側)	
図版 8	(上) 古墳全景(調査後)北より	37
	(下) 古墳全景(調査後)東より	
図版 9	出土土器(1)	38
図版 10	出土土器(2)	39
図版 11	出土土器(3)	40
図版 12	出土土器(4)	41
図版 13	出土土器(5)	42
図版 14	出土土器(6)・五輪塔	43
図版 15	(上) 鉄器(1)	44
	(下) 鉄器(2)	

I はじめに

1. 調査の経過 (第1~2回)

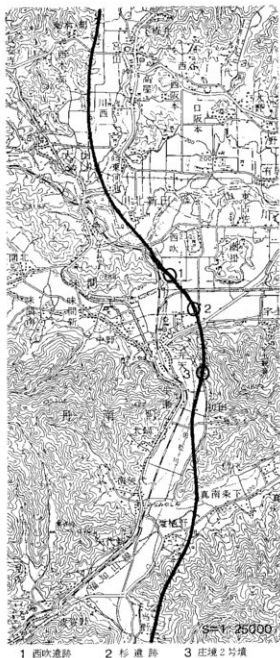
兵庫県下に於ける高速自動車道の建設も、中国道・山陽道と実施され、埋蔵文化財の分野でも播磨地方を中心に調査が実施されている。今回、近畿自動車道舞鶴線の建設が計画されるに至り、文化財の分野では未開拓に近い状態の、丹波地域での調査が実施されることとなった。

建設に先立つ遺跡分布調査の結果、多紀郡で18地区、水上郡で14地区の発掘調査の必要箇所が判明した。調査対象地は、古墳・集落址(生活址)を中心に、窯址群・中世館址なども含まれ、非常にバラエティーに富んでいる。一連の調査結果によって、古代~中世にかけての丹波史の、より詳細な歴史が現実のものとなるであろうと期待される。

近畿自動車道関係の発掘調査は、京都府側にて先行されており、兵庫県では昭和57年度より調査が実施され、現在も継続されている。

初年度の調査は、多紀郡丹南町所在の庄境2号墳、杉・西吹遺跡確認調査であり、共にトンネル、丹南インターチェンジ建設に伴うものである。

調査は、杉遺跡・西吹遺跡の確認から実施し、最後に庄境2号墳の全面調査となり、調査期間は昭和57年10月から、昭和58年2月までのイカ



第1図 近舞線路線及び調査地

月間を費やした。

杉遺跡の確認調査はグリット発掘で実施し、結果は全体的に粘土質の土壌で、集落等の痕跡はなく、全面調査の必要も認められなかった。

つづいての西吹遺跡は、丹南インターチェンジの予定地として広範な地域であり、全域にグリットとトレンチを設定した。また、この地区は、過去の圃場整備に先立つ確認調査の実施結果からも、土器等の出土が予想され、詳細な調査の必要があった。結果は杉遺跡よりも遺跡的であったが、遺構に見るべきものがなく、遺跡の中心地を想定させるに留まった。しかし、遺物の出土は多少ではあったが出土している。

最後に実施した庄境2号墳の調査は、丹波の冬の時期に実施した為、雪等に悩まされての調査であった。

結果的には、現在の墓地に立地している事と無関係でもないような状況で、古墳時代、平安時代、近世の3時期に渡っての墓地遺構が検出された。また、近世墓は群集する可能性があり、付近一帯には、現在の墓地と重複して存在していると思われる。

更に、庄境2号墳は2基の古墳で構成する古墳群であり、2号墳の20m南東には、1号墳として大型の古墳が位置しており、自動車道の建設予定地内に存在する。今回の調査では実施できなかったものの、調査対象遺跡として、今後調査がなされるであろう。(古田)

No	遺 跡 名	所 在 地	No	遺 跡 名	所 在 地
23	篠山城石切場	多紀郡丹南町	40	河津館跡	水上郡春日町
24	古 墳	〃 〃	41	国領散布地	〃 〃 国領
25	真南条下遺跡	〃 〃	42	棚原散布地	〃 〃 棚原
26	初田遺跡	〃 〃 初田	43	野村石剣出土地	〃 〃 野村
27	酒井館跡	〃 〃	44	七日市遺跡	〃 〃 七日市
28	庄境古墳群	〃 〃 大沢新	45	多利七日市遺跡	〃 〃 多利七日市
29	杉遺跡	〃 〃 杉	46	古墳(新)	水上郡春日町多利
30	西吹遺跡	〃 〃 西吹	-1		
31	散布地	〃 〃 丹南町・西紀町	46	〃(新)	〃 〃 〃
32	西木ノ部遺跡	〃 〃 西紀町西木ノ部	-2		
33	古 墳	〃 〃 東木ノ部	46	〃(新)	〃 〃 〃
34	多々奴比古墳	〃 〃 下板井	-3		
35	散布地	〃 〃 下板井	46	多利向山古墳群	〃 〃 〃
36	下板井古墳	〃 〃 上板井	47	多利遺跡	〃 〃 〃
37	箱塚古墳群	〃 〃 小坂	48	南遺跡	〃 市島町南
-1			49	南1号窯	〃 〃 〃
37	古墳群	〃 〃 〃	-1		
-2			49	元最明寺跡(新)	〃 〃 〃
38	小坂遺跡	〃 〃 〃	-2		
39	小坂古墳群	〃 〃 〃	50	南古窯跡	〃 〃 〃
			51	喜多中世墳墓	〃 〃 喜多
			52	上牧古窯跡群	〃 〃 上牧
			53		

第2図 近隣関係調査予定遺跡一覧(水上郡・多紀郡)

2. 位置及び環境 (第3～4図)

庄境2号墳は多紀郡丹南町大沢新に所在する後期の古墳であり、2基を以って古墳群を形成している。

位置的には、国鉄篠山口駅の東南240m程の山裾にあり、篠山盆地の南部に位置する。

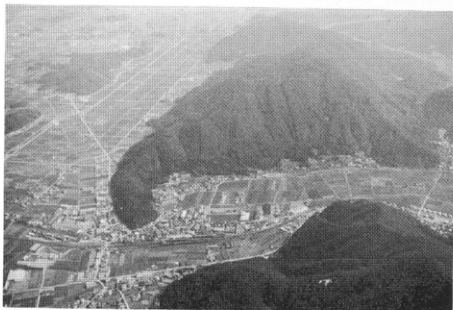
中国山地につらなる丹波山地は、古生層を以って構成され、比較的起伏の少ない準平原に近い高原状の地形となっている。

丹波山地にかこまれた篠山盆地は、縦横に走る断層によって裁断された、地槽の上に形成された盆地である。盆地中央部を西流する篠山川は、流れが緩やかであり、大山川と合流した後に北へと流れる。

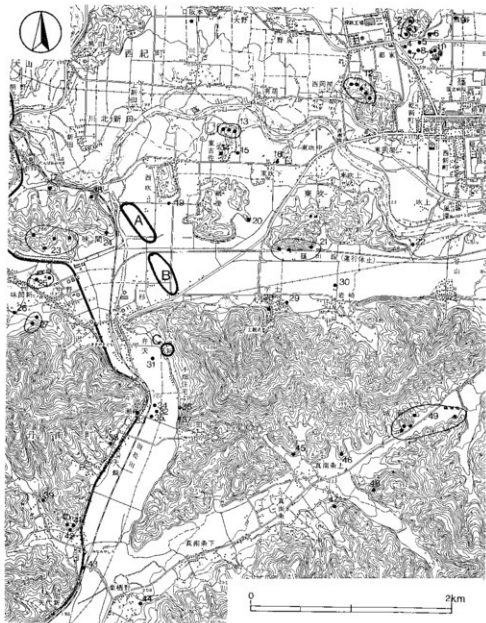
篠山川流域には、流域沖積地の他に、所々侵蝕を免がれた山地が、孤立した丘陵となって散在しており、今回調査地となった西吹・綱目などの丘陵となっている。

現在まで篠山盆地の形成に関して、中生代の湖水堆積物によって成立したと言った意見が強かったが、近年頻繁に実施されてきた圃場整備事業に伴う発掘調査によって、岩崎・谷山・野中・小枕・口坂本遺跡などを中心に遺構が検出されており、否定的な事実が年々増加している。

篠山盆地の歴史は、現在のところ、縄紋時代草創期の尖頭器を出土した藤岡山遺跡から始まり、藤岡山(継統)・奈知屋谷などの縄紋遺跡へと続く。また、弥生時代になると、谷山などの山裾に位置する扇状地に、数多くの遺跡が立地してくる。しかしながら、遺跡としては、圃場整備事業に伴う調査で判明したものが大部分であり、遺跡の全容を伺えるも



第3図 調査地 風景



- | | | | | | | | |
|----|------------|----|---------|----|--------|----|---------|
| A | 西吹遺跡 | 11 | 河原2号墳 | 24 | 西新南古墳 | 37 | 稲尾角跡 |
| B | 杉口坂谷家 | 12 | 市原山群集墳 | 25 | 味新野山古墳 | 38 | 平山奥古墳 |
| C | 庄遊部王龜新鶏茶石市 | 13 | 護摩ヶ谷坪遺跡 | 27 | 音羽山群集墳 | 39 | 南矢代中古墳 |
| 1 | 遺跡 | 14 | 中東古吹遺跡 | 28 | 宇佐幾上古墳 | 40 | 南南矢代野古墳 |
| 2 | 遺跡 | 15 | 西瀬古吹遺跡 | 29 | 宇佐幾上古墳 | 41 | 南南矢代野古墳 |
| 3 | 遺跡 | 16 | 西瀬古吹遺跡 | 30 | 宇佐幾上古墳 | 42 | 南南矢代野古墳 |
| 4 | 遺跡 | 17 | 西瀬古吹遺跡 | 31 | 宇佐幾上古墳 | 43 | 南南矢代野古墳 |
| 5 | 遺跡 | 18 | 西瀬古吹遺跡 | 32 | 宇佐幾上古墳 | 44 | 南南矢代野古墳 |
| 6 | 遺跡 | 19 | 西瀬古吹遺跡 | 33 | 宇佐幾上古墳 | 45 | 南南矢代野古墳 |
| 7 | 遺跡 | 20 | 西瀬古吹遺跡 | 34 | 宇佐幾上古墳 | 46 | 南南矢代野古墳 |
| 8 | 遺跡 | 21 | 西瀬古吹遺跡 | 35 | 宇佐幾上古墳 | 47 | 南南矢代野古墳 |
| 9 | 遺跡 | 22 | 西瀬古吹遺跡 | 36 | 宇佐幾上古墳 | 48 | 南南矢代野古墳 |
| 10 | 遺跡 | 23 | 西瀬古吹遺跡 | | | 49 | 南南矢代野古墳 |

第4国道周辺の遺跡

のは皆無である。その多くは、遺物の単独出土や偶然の表採と言った形をとっており、庄境古墳の付近でも、船岡や又ヶ田坪遺跡の石器出土遺跡が知られている。

車塚は古墳時代になると、全国的に知られる雲部の車塚を代表に、多くの古墳が造られる。篠山川北岸の大芋川と親井川の合流点近くの東本庄に位置し、2基の方墳（姫塚・北条古墳）を伴って存在する、中期の古墳である。

遡って前期の古墳となると、近年調査の実施された、新庄の前山古墳があり、内部主体に竪穴式石室を持つ。中期になると前述の車塚古墳をはじめ、前方後円の丸山1号墳や、径60mで周濠を持つ、大円墳の新宮古墳が、郡家地区に認められる。郡家地区には、碁石塚・玉了塚・茶ノ木塚・八幡塚・いしくど古墳が集中している。

後期になると古墳の群集化が見られ、当地方でも大山地域を中心に、西山・遊谷・市河原・諏訪山・護摩ヶ谷・西成山・味新塚・佐幾山・真南条上などの群集墳が知られている。

群集墳の中には、木棺直葬や横穴式石室を内部主体とするが、当地方の横穴式石室には特異な形態を持つ古墳が見られる。すなわち、石棚を架構する岩井山3号墳や、T字形の平面プランを持つ稲荷山古墳などであり、渡来人との関係が論議される古墳である。

集落址では、寺内・口坂本遺跡などの調査に伴った住居址が検出されている。

歴史時代の遺跡は、古代山陰道の通路にあたる小野駅が存在するが、今のところ場所の断定はされていない。また、郡家の地名に関連して、郡衛の跡の存在が論じられている遺跡もある。東浜谷遺跡がそれであり、昭和54年の園場整備事業に伴って、「郡」の文字が印刻された土器が出土している。同時に円面硯や黒書土器も出土しており、奈良時代の郡衛となる可能性を持つ。

生産遺跡については、今のところ明確には見られないが、味間付近の良質の粘土や、古墳等から出土する窯壁付着の土器などから、そんなに遠くない所に、古墳時代の窯址がある可能性が高い。また、一部に存在を述べる意見もあるようである。

なお、古代寺院址の可能性を持つ寺内・竜門寺遺跡からは、瓦の出土があり、王子では瓦窯址が確認されている。

(吉田)

〔参考文献〕

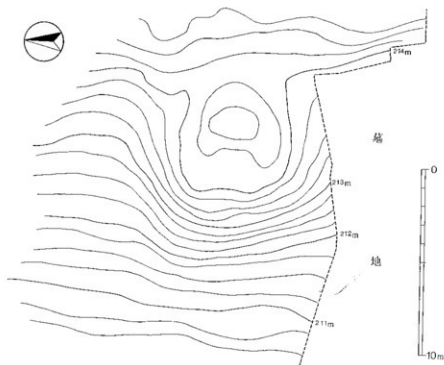
- | | | |
|--------------|--------|----------------|
| 「西山北古墳調査報告書」 | 1972.3 | 多紀郡教育事務組合教育委員会 |
| 「篠山・多紀町の古墳」 | 1974.3 | 〃 |
| 「古代祖先のあゆみ」 | 1980 | 篠山町教育委員会 |
| 「丹波・口坂本遺跡」 | 1981 | 多紀郡西紀月雨町教育委員会 |
| 「放光 No.197」 | | 多紀文化顕彰会 |

Ⅱ 庄境 2 号墳の調査

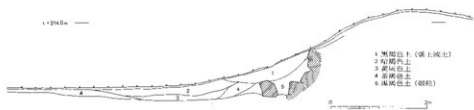
1. 墳丘の構造 (第5~7図)

本古墳は、東から西に向けて傾斜する緩斜面に位置し、周囲に墓地が築かれている。墳丘東側は、墳裾の後方から急激に急傾斜となり、山裾いっばいの所に位置する。墳丘の規模としては、東西・南北ともに8.8mを測り、高さは平均1.5mとなっている。墳形はやや方形に近い形状を呈しているが、外周に列石が巡っている影響で、このような形状になっていると考え、一応円墳と呼んでおきたい。列石については後述する。

墳丘の中央に石室は位置しているが、石室と列石とは正しく直交、あるいは平行の関係を保っていない。このことは、石室構築と列石構築の順序、前面の列石と背面の列石の構築手段等の条件的制約の結果と思われるが、墳丘東側の上下2段の列石は、ほぼ平行関係にある。墳丘たち割り断面の観察から墳丘を見ると、石室構築時に、奥壁付近の最下段の石を据え易くする為、地山の黄色土を掘り下げている。次に上段と下段の列石の関係をみると、上段列石は地山面まで石組みがなされており、その後、下段の列石が築かれている様子で、上段の列石は、奥壁の控え的な要素も兼ねている。



第5図 地形測量図 (調査前)

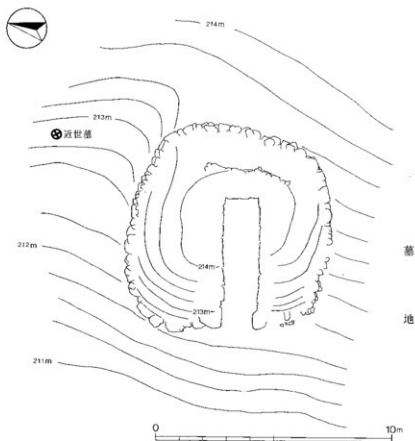


第6図 墳丘北側土層断面図

墳丘上は、地形の傾斜にそって傾斜してはいるが、水平に近く、傾斜の高い東側の墳丘は低く、低い西側は高くなっており、石室入口側からの墳丘は、かなり高く感じられる。

南北も同様に、傾斜の低い方は高く、高い方は低くなっており、墳丘の高く築かれている北側の列石に、他の列石に見られない細かな注意と努力の跡がうかがえる。

墳丘裾の断面観察から、土層の堆積状態を考えると、墳丘上には、3分類が可能な黒色系の火山灰が堆積しており、ある一定の時間を隔てて二度程の盛土流出土層が、墳丘裾に見られる。列石の上段と下段の間は、テラス状となり水平になっている。(吉田)



第7図 地形測量図(調査後)

2. 外部施設

列石（第8・9図、図版7・8）

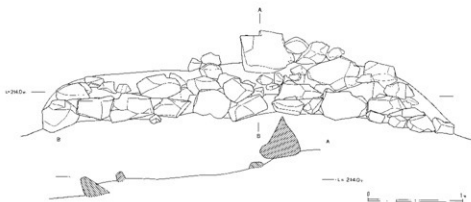
当古墳では、2カ所から列石を検出している。一つは石室奥壁の背後に存在し、一つは墳丘裾を巡らす列石群である。

石室奥壁の背後に検出された列石は、墳丘裾と石室奥壁間にあり、距離的には石室側の近いところに存在する。当初の検出は列石中央の最も大きい石の頭が露出しているだけであった。近年、列石に関して、検出例が数多くみられるのでさらに掘り下げたところ花崗岩系の大小さまざまな石が並び、長さ約4mを測る。

列石は奥壁に平行するかのように一直線であり、弧状もしくはコの字状に積まれた様相を示さない。積まれた石の段も1段から多いところで4段程度であり、積まれた面は墳丘の盛土途中である。列石頂点の高さは、石室奥壁の最も残りのよいところから約20cm下である。



第8図 石室・列石平面図



第9図 墳丘東列石立面図

他の古墳でみられるような列石の築造が、弧状もしくはコの字状でないこと、積まれた面が途中から始まっているところから、石室奥壁側を擁護することを目的とした可能性が高い。

墳丘裾を巡る列石は石室開口部に接続して築かれており、一部欠落するが、墳丘裾を全周する。列石の出土状況は、墳丘の東西側は1段ないし2段、南側は3段ないし4段、北側はおおよそ6段ほど残存している。石材はいずれも花崗岩系を用いており、大きさは拳大からひと抱えもあるような大きい石もある。

列石の積み方は基部には大きい石を配するが、とりわけ墳丘の東西側すなわち石室の奥壁と開口部側は、墳丘南北側に較べて比較的大きさの揃った大きい石を配している。この配石は墳丘擁護及び古墳が斜面に立地することなどが考慮されたのかもしれない。列石基底部の中には一部ではあるが、石を安定させるために小さな石をかませる方法をとっている箇所もみられる。

残りのよい墳丘北側列石の積み方を概観してみると、斜面に平行するのではなく、まず最初に基底部の石を配した後、斜面の下側すなわち石室開口部側から積み始め、石の頭が水平になるよう逐次積み重ねていたと思われる。列石は自然岩を組み合わせた野面積ないし午券積の石垣状を呈す。残存高約1mであった。これらの石材間の一部には、裏込め石もしくは石を安定させるために小さな石をかませたとと思われる石が存在する。

墳丘北側の残りよいところを概観したが、石室奥壁背後にある列石とは分け、列石と呼ぶよりは積石をして墳形を成していると言った方がよいかもしれない。(輔老)

3. 内部主体の構造

石室 (第8・10図)

本石室は、主軸をS76°Wにとり、おおむね西方向に開口する横穴式石室であり、無袖の形式である。残存状態は非常に良く、天井石が除去されている点を除けば、側壁の石など大部分が残っている。

墓壇は、墳丘上では見出しされず、底部地山面を少し掘り下げて、基底部を整形し、基礎の石を設置するに留まっている。

石室には、付近の山で天石として産出する、通称「丹波石」と呼ばれる石を使っている。

石室は長さ5.6m、幅1.5mの大きさである。奥壁は高さ1.5m、幅1.4mで、石組みは基本的には2段である。すなわち、下段には比較的大きな石を設置し、右上段に1石を置き、左には2石を積んで、奥壁を構成している。また、奥壁の内面は、傾斜に添って西方向に内向している。

右側壁は奥壁の高さから考えると、4段の石積みであったと想定されるが、完存しているのは3段までであり、奥壁に接する位置に1石残存する。これが4段目と思われる。

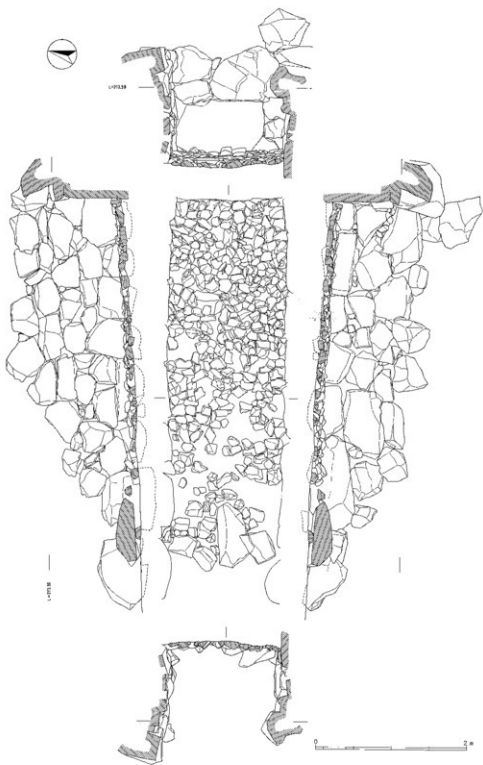
残存高1.3mで、閉塞石付近で0.5mと低くなっている。石組みは、最下段に比較的安定感のある石を据えている他は、60cm程度の石を組み合わせており、石と石の空間には、20～30cmの小隙を入れて固定している。左側壁の石組みも同様であるが、右側壁に比べて良く残っており、4段目まではほぼ完存している。ただ石は右に比べて小さくしており、石を多く使うことにより、石組みは複雑になっている。側壁も奥壁同様、直立しておらず、右側壁は石室内に内向し、左側壁は外向ぎみに立つ。このことは、地形の傾斜と合致する点から、土圧等の後天的な要因による結果と思われる。

床面には、ほぼ全域に20～30cm程度の小隙が敷きつめられており、奥壁から4m付近で閉塞石にあたる。閉塞石は大小4石から成っており、側壁の石と石の空間に、一部食い込ませている。閉塞石から墳丘裾までは、更に0.5m程側壁の石が続いている。

また、床面は水平な状態ではなく、地形の傾斜に添って、奥壁から入口付近に向かって傾斜しており、傾斜角5～6°を測る。

石敷の下には、黒褐色の火山灰が存在し、その下は20cmで黄色の地山となる。側壁の石は石敷面から10～20cm下まで埋没している。石室入口には、左右に大きな石が、門柱石のように据わっており、外部の列石と石室が合致する。

(吉田)



第10圖 石室 尖測圖

石室内火葬墓 (第11図)

調査当初から、奥壁付近より側壁奥の石組みに、他の位置の石と色調に変化があると感じていたところ、奥壁付近一帯の石の変色は、焼成によるものであり、非常に脆くなっていることが判った。

原因については、近い過去に石室内で、焚火を行ったものだろうかと考えていたが、調査の進むに伴って、覆土を掘り下げていくと、より赤焼けが鮮明になり、新しい時代の焚火などではなく、更に古い時期の所産であると判明してきた。結局、古墳時代の床面のある石敷から30cm上面で、側壁の石の赤焼けは終り、床面となって炭化物等の出土もあった。

更に、石室内で石の焼けていた範囲を調べると、奥壁から入口に向かっては2.3mまで、奥壁は全面に、側壁では右側壁を中心に赤く焼けていることも判明した。右側壁の石組みを目安として、深さを測定すると、下から1段目と2段目の境界付近が底面であった。これらのことを総合すれば、石室内奥壁際の右側にて火葬が行われたと判断される。また、火葬に伴って底面からは、土器が3点(須恵質2点、土師器1点)副葬の状態で検出されている。須恵質の土器は、共に完形で見つかったが、土師器の甕は、付近一帯に細かく割れて散乱しており、甕の付近からは、人骨の細片が多数同時に発見された。甕が細かく割れていた点については、底面に石室を構成していた石が落下しており、後天的に割れたものか、当時すでに割られていたものか不明である。

石室の二次使用については多く知られており、埋葬を伴うものでは、中世の骨蔵器を使った例が多い。その他では、寛永通宝などを伴う二次使用が知られている。

今回の二次使用が平安時代でもあり、地域によっては、墓上祭祀なども引き続き実施されている時期の埋葬であり、古墳被葬者と火葬人骨との間に、何らかの血縁関係などの結びつきがあるの

か、また、古墳墓としての認識や観念が、先祖墓として後世に残るとすれば、どの期間継続するのであろうか興味深く、血縁関係にあれば、平安時代の追葬と言えるかも知れない。(吉田)



第11図 火葬墓出土状況

4. 遺 物

遺物出土状態

今回の調査で出土し、図化の可能であった遺物の出土地点は、石室内の床面が中心であり、一部に羨道の前方、墳丘の裾部に位置するものも含んでいる。

遺物は土器と鉄器の2種類であり、土器の中には土師器を1点、鉄器の中には金環を1点含んでいる。遺物の出土状態は、石室内の全域から出土しており、まさに支室の奥壁から閉塞石の直下まで散乱分布していると言える。

横穴式石室など追葬を目的とした埋葬施設においては、数回の追葬に伴って、土器にも時期差等が想定される。このことから、今回の調査にあっても、幾つかの土器群に分離すべきと思われるが、なにぶんにも、天井石の抜き取り、側壁の落石などにより全てが、完全な形で残存でなく、細片あるいは数点の破片となっているものも多い。このような状況のなかで、あえて土器群として分離するとすれば、奥壁際の右側に残存していた土器などが最古の埋葬時の土器群として考えられる。他の土器は全体的に分布しており、閉塞石付近の側壁右側を中心として、大きな集まりが考えられる。また石室中心部付近にも、一つのまとまりが考えられる。器種的に分布を見ると、埴輪は全体で4個体出土しているが、分布状態は左側壁の奥壁付近と、石室中心部に各1個体、右側壁真中付近から入口付近にかけて、2個体分散して残存している。

次に高坏は、右側壁中央付近に位置し、壺類は石室中央に位置していた。

また、鉄器について見ると、奥壁付近を中心に古いタイプの鉄鏃が分布しており、土器同様に、他は石室内全域に散らばって残存していた。

遺物の総数は、土器で48個体、鉄器で18個体である。

土 器

① 火葬墓の土器（第12図・図版14）

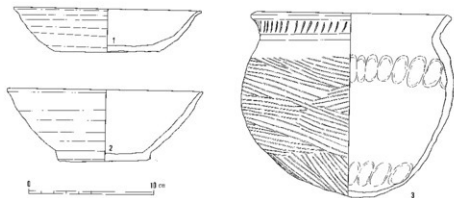
火葬墓に伴って出土した土器は3点である。2点が須恵質で、残り1点が硬質の土師器である。

坏（第12図-1）

口径15cm、器高3.5cmの須恵質で坏の形態をとる。色調は灰褐色に近く、底部はヘラ切り離しのままで、未調整である。体部は内外面ともヨコナデ調整がなされており、口縁端部は外向するが丸く収められている。器壁の比較的薄い土器である。出土状態は右側壁に接して、底部から上を向いた状態で出土した。

碗（第12図-2）

口径15.7cm、器高5.8cmの須恵質碗である。色調は1と同様に、灰褐色を呈し、底部は



第12図 火葬墓出土土器

ヘラ切り未調整のままである。体部は内外面ともヨコナデ調整を行っているが、胎土には細礫を含んでいる。また、口縁部は波打つような状態で、歪んでいる。

甕 (第12図-3)

口径16cm、器高14.8cmの土師器甕である。口縁端部はやや角ばった感じで内向き、頸部にヘラ状工具による刺突圧痕が、約5mmの間隔で存在する。外面には、肩部付近から底部全体にかけ、やや粗いタタキ目が右下りぎみで打たれている。内面には、肩部と底部付近に指頭圧痕が施されている。底部は尖りぎみの丸底である。内面には、使用に伴う煤の付着が著しく、煮沸に使用されていた土器の転用と思われる。器壁は底部に向かって薄くなり、熱効率に適した器形である。他に余り類例の知られていない土器であり、細かく破片となって出土した。また、人骨を埋納していた可能性が強い。

② 須恵器 (第13～15図・図版9～14)

坏蓋 (第13図-1～9)

口径13.5～15cmの坏蓋が9点出土している。

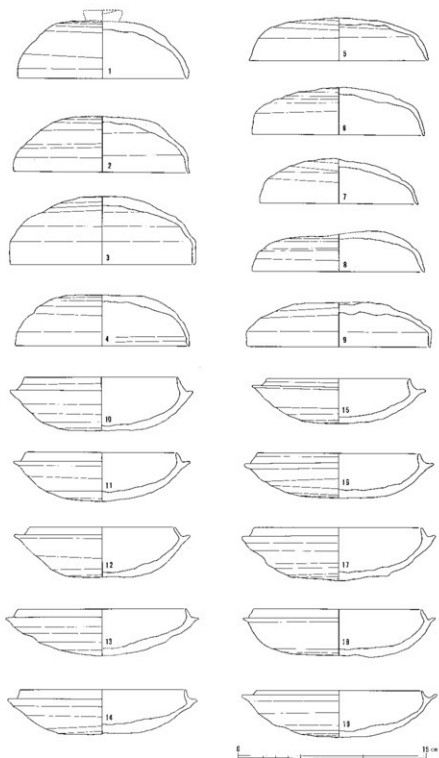
1は中くぼみのつまみが付く蓋であり、器高は4.6cmである。つまみは欠失し残存していないが、痕跡は明瞭に残る。器壁は全体的に厚く、口端部は外傾ぎみに丸く収まる。天井部はほぼ平らになっており、ヘラ削りが施されている。

(2・3)は器高が高く、5cm前後を測る。全体的に丸味を持った器形を呈し、ヘラ削りは天頂部付近のみである。

(4)は天井部の平らな器形で、中央部付近が窪む。口縁部内面には凹線を持つ。

(5)は扁平な器形で器種も比較的薄い。天井部はヘラ削りも広く、口端部は外傾ぎみに踏んばる。また、坏10とセット関係にある。

(6・7)は天井部のロクロ目が著しく、口端部は共に外傾ぎみである。7の口径は12.7cmと小さい。



第13圖 出土土器尖脚网(1)

(8・9)は偏平ぎみな器形で、天井部は平らである。(8)の口縁部は外傾ぎみであるが、9は内傾している。蓋は全般に、天井部と口縁部の境界の峻など明確でないものばかりである。

坏身(第13図—10~19)

口径11~13.5cmの小型の坏身である。底部は平らに近いタイプ(10・12・13・16・17・18)もあるが、全体的に尖りぎみとなっている。口縁部たちあがりは、内向し低くなっているが、(10)のように比較的高いものもある。

また、(19)のような特に低いタイプも存在する。受部は水平か上方に向くものばかりであり、たちあがりとの境界付近に明確な凹線の存在するものもある。口縁・受部ともに端部は丸く収められている。底部のヘラ削りは、全体の3分の1付近までであり、2分の1付近まで施されているものはない。

蓋

前述した坏蓋の形態を持つタイプ(20~25)と、乳首状のつまみを持つタイプ(26~28)があり、前者を蓋Aとし、後者を蓋Bとする。

蓋A(第14図—20~25)

坏の蓋のみではなく、壺類の蓋となるものも含む。口径・器高はさまざまであるが、共に小型品である。

(20~23)は共に、天井部をヘラ削りしており、口端部が内向する(20・22)と外向する(23)がある。また、天井部と口縁部の境界が凹む。

(21・24・25)の天井部はヘラ切り未調整であり、器壁は厚い。

蓋B(第14図—26~28)

頂部に乳首状のつまみを持ち、天井部付近は、回転を利用した丁寧なヘラ削りで平らにしている。口径は10~11cmと一定しており、口端部にもかく、内面にかえりを持つが、かえりは口端部よりも上方で、口端部以下に突出することはない。

坏(第14図—29~36)

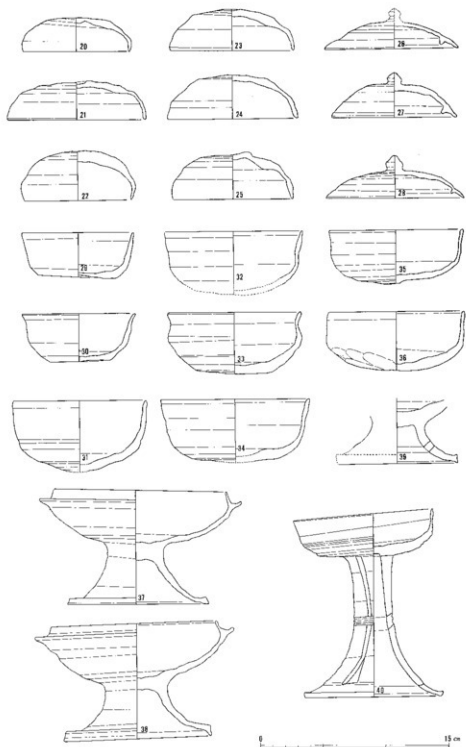
底部を丁寧にヘラ削りし、平らにしている(29・30)と、底部付近のみをヘラ削りしている(31~35)と、回転を利用しないでヘラ削りをする(36)がある。

(29・30)は体部下半部から底部にかけ、丁寧な回転ヘラ削りを施しており、共に口縁は外反する。器形的には小型である。

(31~35)は底部と体部の境界付近のみ、ヘラ削りが施しており、底部は尖りぎみである。(33)のみ口縁にかけて、体部がくの字状に外反する。

(36)の底部は未調整のまま、回転を利用しないヘラ削りを行っている。器壁も厚く、口縁は垂直かやや内向ぎみである。

高坏(第14図—37~40)



第14圖 出土土器実測圖(2)

高環は全部で4個体出土している。器形的には、短脚(37~39)と、長脚(40)の2種類に分類できる。

(37・38)は口径13~13.5cm、高さ9.3cmの短脚一段の高環である。口縁のたちあがり、はやや内向きにたち、受部は上方に向く。脚部に透しは存在せず、脚端部が高く垂直に踏ん張るタイプ(38)と、低く外側に着地するタイプ(37)がある。両者とも器壁は薄く、たちあがり端部は非常に薄く造られている。

(39)は脚部の破片である。脚部には、円形の透しが2方に施されている。また、前2者に比べて脚の高さは低い。

(40)は長脚二段透し高環であり、口径11cm、高さ14.5cmを測る。透しは三方で、長方形を呈し、脚端部は緩やかに外方向に広がる。胎土は良質の粘土が使用されており、他と明確に違う。口縁下2cmと、脚部裾付近に、各1条の沈線を持つ。

提瓶(第15図-41~44)

全部で4個体出土しており、大きさは12~20cmとバラエティーに富んでいる。41は最も小型で、復元高約12cmであり、口縁部を欠いている。体部は前面・背面ともに丸くなっており、両側の耳は退化して、形式的に残っているに過ぎない。調整は前面がカキ目であり、背面はヘラ削りである。

(42)は中型で高さ15cmを測る。唯一の完形品である。口縁端部は緩やかに外反し丸く収まる。体部前面は丸く、背面はほぼ平らか、少し凹んでいる。また、体部両側の耳は扁平な丸形である。背面の調整は、不鮮明なカキ目であり、背面は一部にヘラ削りが見られるものの、中央は未調整に近い状態である。

(43)は口縁を欠いており、(42)同様丸くて扁平な耳を持つ。体部前面は丸く、背面はほぼ平らである。体部の調整は、前面が一部ヘラ削りであり、背面は粗いカキ目である。口縁と体部の境界は凹む。全体に器壁は厚い。

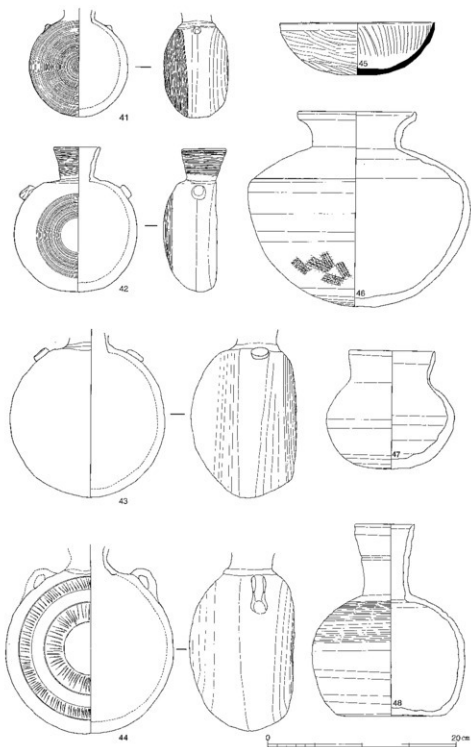
(44)も口縁を欠くが、体部両側に付く耳は環状になる。体部前面には、二重円状にヘラ状工具による刺突が、不規則に施されている。背面はヘラ削り調整が施されている。

広口壺(第15図-46)

口径12.5cm、器高20.7cmの広口壺である。須恵器とは言え、赤焼けの状態であり、赤褐色を呈す。口縁端部は上方に開き、内面に軽く段を持つ。比較的肩の張る器形であり、一条の沈線を持つ。体部下半には、柵目格子状のタタキが細かく打たれ、後にナゲ消されているが、部分的に残る。底部はヘラ削りで丸底になっている。器壁は厚い。

直口壺(第15図-47)

口径9cm、高さ12cmの直口壺である。口縁は肥厚して外反する。頸部の器壁は非常に薄く、底部に向って厚くなる。体部はヨコナゲ調整であり、底部のみヘラ削りである。色調は灰褐色である。



第15图 出土土器实测图(3)

長頸壺 (第15図-48)

口径6cm、高さ20.5cmの長頸壺である。肩部から体部上半にかけて、細かな沈線が数条施されている。口縁端部は上方に外反し、頸部中央付近に太い沈線を一条有する。器形的には安定感のあるタイプで、体部は丸味を持つ。

③ 土師器 (第15図・図版13)

椀 (第15図-45)

口径16.5cm、器高5.5cmの器壁の薄い椀である。口縁直下で少し凹み、底部に向かって球形に丸くなる。体部外面では、口縁部付近をヘラ磨き、底部付近をヘラ削りし、内面には斜方向に暗文を施している。胎土には砂の混らない、良質の粘土を使用しており、赤褐色を呈す。

(吉田)

[参考文献]

「陶邑古窯址群Ⅰ」1966 平安学園考古学クラブ

鉄 器

石室内から耳環1・のみ1・鉄鏃13・不明3が出土した。それぞれの出土状態は石室内の各所に散在するという状況であった。このことは追葬のたびごとに遺物が移動した結果であろう。

耳 環 (第17図・図版15)

石室中央部よりのやや奥壁に近いところで出土した金環である。銅芯金製でほぼ円形に作られており、長径28.5cm短径2.70cm、重さ19.74g、開口部の幅0.2cmを測る。金環の断面は長径0.8cm短径0.65cmの楕円形を呈し、開口部は比較的明瞭な稜線をもつ。錆化の進行がみられ、金張の剥離面には緑青が生じている。

の み (第17図・図版15)

石室中央部の南側壁に近いところで出土した。袋柄状のみである。現存長7.1cm身中央付近では長辺約0.8cm短辺約0.5cmの断面長方形を呈す。刃部は身中央付近から先端に至るにしたがって長辺はより広く短辺はより薄くなる。刃部は欠損している。袋部を作っている部分の厚さは約0.15~0.3mであり円錐状を示す。木柄挿入口は約0.7cmの円形を呈し、袋そのものの深さは約3.7cmを測る。袋部内の面は木目痕ではなくうず巻状の痕跡が、入口から約2cm奥まで存在する。木柄のほぞ部に何らかのものを巻きつけたのち挿入したことが推定される。

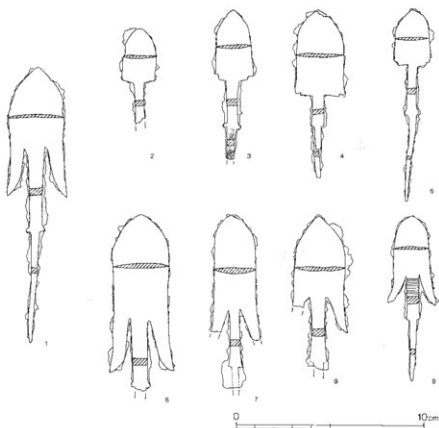
鉄 鍬 (第16・17図図版15)

石室内の各所より出土した鉄鍬はすべて長頸鍬に属し、おおよそ四形式に分かれる。

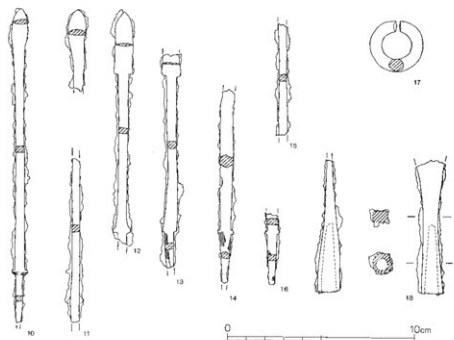
(3・4・5)は特異な部分をもつ。(4)は脇扶を有しながらも脇扶と筥被間に凸状の突起をもつ。(3)は凸状の突起のみを有する。(5)は錆化が著しく、形状がやや凸状突起に似ている同一形式と思われる。(11)は鍬部が不明であるが(2)と同様に扱った。(14・15・16)については鉄鍬の各部であろう。その他の筥被には糸巻き痕、(3)の茎には何らかのものを巻いた上で装着したと推定される。(輔老)

註 この点についてさらに形式を細分化することができるが、筥被脇扶柳葉式から広筥被筥被三角式の中間形式か、新しい形式かは断定できないので形式名は附さないでおく。

短い時間での資料等を見開した中では後藤守一「日本古代文化研究」1942、582頁184図50・69に近い型であるが鍬の有無で異なる。鍬を有する型としては188図162に近い型である。



第16図 鉄器 実測図(1)



第17図 鉄器実測図(2)

番号	重さ	全長	鏢身長	鏢身幅	筒被長	基長	形 式	備 考
1	20.80	14.6	6.9	3.2	4.4	6.0	筒被両丸造 鏢快槌葉式	
2	5.68	(5.1)	2.8	1.7	(2.2)	/	広鏢両丸造 鏢筒被三角式	
3	11.43	(8.0)	3.5	2.1	2.7	(1.7)		基部に木質痕
4	12.31	(7.35)	(4.6)	(2.6)	1.7	(1.2)		鏢快残
5	7.99	10.3	3.0	1.8	2.5	4.7		
6	19.49	(9.4)	8.4	3.4	/	/	筒被両丸造 鏢快槌葉式	
7	15.26	(9.2)	6.7	2.7	3.1	(1.2)	筒被両丸造 鏢快槌葉式	
8	15.47	(8.1)	4.3	3.0	3.4	(0.4)	筒被両丸造 鏢快槌葉式	
9	8.15	8.8	4.8	2.4	2.5	3.2	筒被両丸造 鏢快槌葉式	鏢基部に巻き跡 基部に木質痕
10	12.38	16.8	2.0	0.8	12.2	(2.5)	鏢無両丸造 鏢被擊前式	
11	22.45	(4.4) (8.7)	2.4	0.9	(7.6)	(1.0)	鏢無両丸造 鏢被擊前式	鏢部を有すると思わ れる
12	10.22	12.4	3.3	1.0	8.5	(0.6)	両丸造 鏢筒被擊前式	
13	9.55	11.3	(1.15)	1.0	8.2	(1.9)	両丸造 鏢筒被擊前式	基部に木質痕
14	11.3	(10.3)	/	/	/	(2.6)		基部に木質痕
15	3.82	(5.9)	/	/	/	/		
16	2.34	(3.75)	/	/	/	2.7		

注() 現存長 計数単位φ・cm

第18図 鉄 鏢 観 察 表

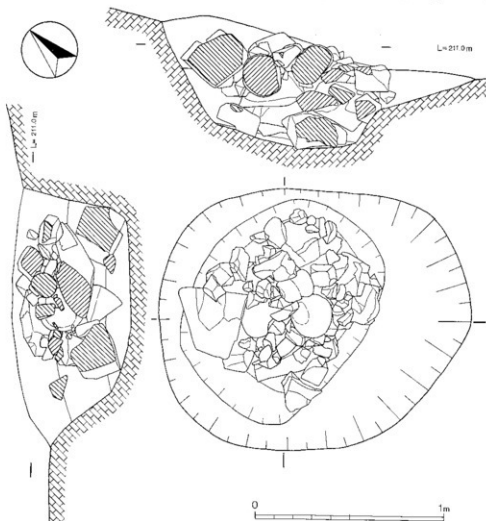
5. 墳丘外の遺構

近世墓（第19・20図、図版2・14）

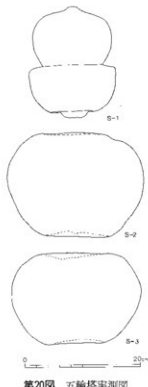
墓は古墳の裾から北東約5mの位置で検出された。長径約1.66m・短径約1.38mの楕円形に近い掘方をもつ土壌墓である。墓壁の深さは検出面から約60cm内外であり、墓壁の壁に一つの段を有する。

当初五輪塔は供養塔として建立されたものであるが、供養塔の意味が忘れられ、放棄されたのち空・風輪及び水輪が多数の角礫と共に墓壁内に埋められた。遺物は何ら検出されなかったが、墓は五輪塔の年代からすると室町時代以降のものであるが、蔵骨器の利用・土葬が一般化という二つの要素からすると、江戸時代に葬られたものであろう。

発掘調査対象の庄境1号・2号墳は現在まで墓地として使用している地区と接している。



第19図 近世墓実測図



第20図 五輪塔実測図

調査中発見した墓もこの一群の一つであろう。埋葬方法は現在も両墓制をとっており、埋め墓はまず墳を掘り、次に棺を納め、石を積み上げる方法を行なう。概観してみると横石塚の様相を示すが、時期が経過するにつれ横石の上は平らかもしくは中央が凹む状態になる。

今回発見された墓はこの様相をもっていない。理由は墓塚上に大きな土石流の堆積があり、この自然の力によって上部が流失したのかもしれない。

五輪塔の空・風輪1、水輪2が、出土した。3個体とも同一石材で花崗岩系である。種子は彫まれてはいないが、室町時代初期のものである。

空・風輪(S-1)は一石で作られており空輪の尖端の一部を欠く。残存高約10.1cm、中央部附近で最大になり径約13.6cmを測る。風輪は高さ約8.2cm上端に近いところで最大になり径約22.7cmを測る。空・風輪とも平面に投影してみるとほぼ円形であり、風輪の下にはほぞが付く。

水輪(S-2)は高さ約18cm、最大径となる中央部附近では径約23.8cm、(S-3)は高さ約15.8cm、最大径に

なる中央部よりやや上方で径約22.7cmを測る。(S-2・S-3)を平面に投影してみると前者はやや楕円気味、後者はほぼ円形である。両輪とも下すばまりの形状を呈す。接合面は上下ともやや凹状に刻む。

(S-1・S-2・S-3)のセット関係を仮定すると空・風輪(S-1)に火輪、さらに水輪(S-3)、その下に地輪がつく。(輔老)

註 この稿については黒田淑正氏に多くの教示を得た。

Ⅲ 杉・西吹遺跡確認調査

1. 杉地区(第21~22図)

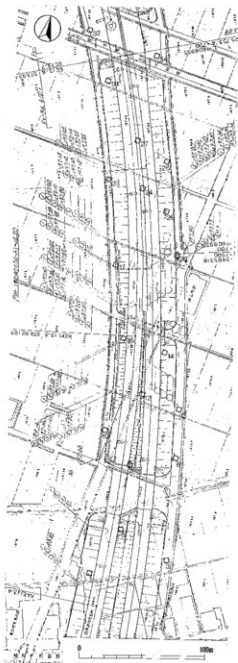
県道大沢新篠山線と、新しく建設されたバイパスに囲まれた範囲が杉遺跡であり、丹南町杉に所在する。近畿自動車道舞鶴線の建設に先立つ分布調査の結果、土器等の散布が報告された。分布調査結果に基づき、遺構の有無確認の為の調査が実施されることとなった。

調査の方法は、 2×2 mのグリッドを20カ所設定し、土層が変化する都度、清掃精査する行為を繰り返して実施した。

調査の結果、基本土層としては、①耕土、②(黄)灰色粘土、③灰色粘土が見られ、最下層には黒灰色粘土(ヘドロ)と、灰白色粘土の両者が見られた。すなわち、灰白色粘土をベースとする地区は、17・24・27・34Gを結ぶ地区であり、粘土質ではあるが、しっかりしたベースを持つ。逆に、黒灰色粘土(ヘドロ)をベースとする地区は、材や葦の炭化物を含み、常に水流の集まる所であり、遺物の発見もない。調査結果から総合判断するならば生活地の可能な基盤面は、南側山塊付近まで存在せず、全て湿地状の土地を示している。

バイパス付近に若干の高地が存在するが、遺物の出土は皆無に近い状態である。

遺跡の存在するのは更に西方と想定する。



第21図 杉遺跡坪設定図

2. 西吹地区 (第23~24図)

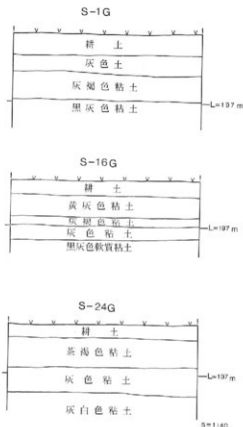
西吹遺跡は丹南インターチェンジの建設予定地であり、西に住吉川が流れ、南は長藪川で杉遺跡と区別されている。また、近接して古墳群も存在している。

昭和46年に実施された開場整備事業に先立つ発掘調査では、遺構は明確でなかったものの、まとまった土器の出土が見られた。今回の調査は、2×2mのグリットを44か所と、トレンチを4本設定し実施した。調査の結果、基本土層としては、①耕土、②灰色粘土、③褐色系粘土、④灰色粘土と、①耕土、②茶灰色粘土、③黒褐色粘土、④灰褐色粘土とであった。前者の分布する地区は、長藪川北方から西吹の集落へかけての地域で、北へ向って高くなる。また、後者は、住吉川の周辺部一帯であり、序々に低くなって川に向かう。

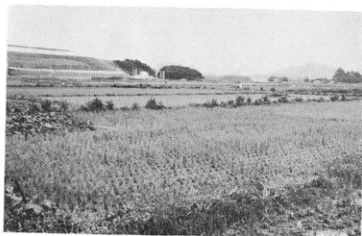
調査の結果、明確な遺構は検出されなかったが、29Gにて中世の水路痕が見つかった。遺物としては、15Gにて磨滅した状態で、土師器が出土した。その他特に記すべきこととしては、6G付近を中心として、灰層面が存在することである。遺構・遺物は全くなく

灰色粘土と灰色粘土に挟まれた土層に、厚さ1~2cmの炭が見られる。炭の本質はワラ状のものである。更に、周囲を拡張したが、遺構はなかった。

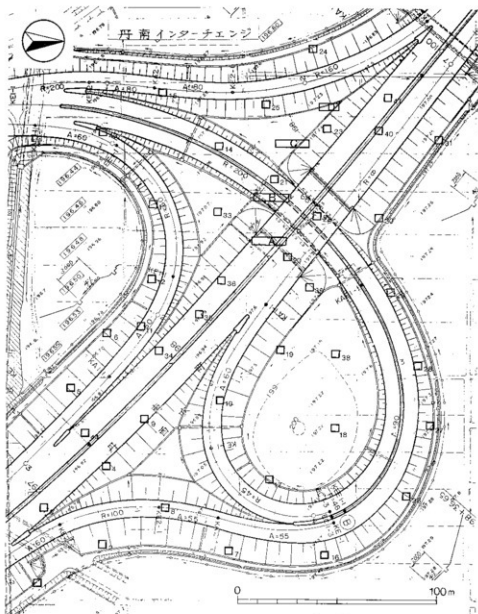
トレンチ調査では中世以降と思われる溝を確認したが、大



第22図 杉遺跡土層断面図



第23図 西吹遺跡 遺景



第24図 西吹遺跡坪設定図

正時代に実施された耕地整理にて消滅した水路と判明し、全面調査は実施しなかった。

調査結果の総合判断からすると、全体的に遺物は散布しているが、前述の耕地整理にて消滅した可能性が高い。また、出土土器の中心時期は、中世初頭頃が多く、瓦器碗・粗いタタキ目のある甕類が多い。古代の土器では、須恵器があり、椀碗の破片などが出土している。考察するならば、遺跡の中心は西吹集落付近にあり、今回調査を実施した北方に中心を求めたい。

(吉田)

〔参 考 文 献〕

- | | | | |
|----|---------|---|---------------------------------------|
| 1 | 後藤 守一 | 「日本古代文化研究」 | 1942 (昭17) |
| 2 | 小林 行雄他 | 図解考古学辞典 | 1959 (昭34) |
| 3 | | 「兵庫県指定文化財調査報告書」 | 兵庫県教育委員会
昭39 ~ 昭57 |
| 4 | 石野 博信 | 「長尾山古墳群」兵庫県埋蔵文化財調査集報 I | 兵庫県社会文化協会
1971 |
| 5 | 柳田 純孝 | 「片江古墳群発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書 24集 | 福岡市教育委員会
1973 |
| 6 | | 新修芦屋市史—資料篇— | 1976 (昭51) |
| 7 | 堤 圭三郎他 | 「昭和51年度国道9号線バイパス関係遺跡発掘調査概要」
(小命岐古墳群)「埋蔵文化財発掘調査概報」 | 京都府教育委員会
1977 |
| 8 | 岡田 博他 | 「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査書 9」 | 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 15
岡山県教育委員会
1977 |
| 9 | 森下 大輔 | 「加東郡の文化財」石造篇 | 加東郡教育委員会
1977 (昭52) |
| 10 | 勇 正広他 | 「苔染園の古墳」 | 西宮市教育委員会
1978 |
| 11 | 榎本 誠一他 | 「三田市青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報」 | 兵庫県教育委員会
1978 |
| 12 | 堤 圭三郎 | 「坊田5号墳発掘調査概要」 | 「埋蔵文化財発掘調査概報」
京都府教育委員会
1979 |
| 13 | 安藤 信策 | 「国道9号線バイパス関係遺跡昭和53年度発掘調査概要」
(押田古墳群)「埋蔵文化財発掘調査概報」 | 京都府教育委員会
1979 |
| 14 | 芦の芽グループ | 「芦屋市八十塚古墳群・岩ヶ支群分布調査報告」 | 兵庫県埋蔵文化財調査集報 4
兵庫県教育委員会
1979 |
| 15 | | 図説歴史散歩換 | 山川出版
1979 |
| 16 | 原野論喜夫他 | 「国道9号線バイパス関係遺跡昭和54年度発掘調査概要」
(押田9号墳)「埋蔵文化財発掘調査概報」第1分冊 | 京都府教育委員会
1980 |
| 17 | | 長瀬高浜遺跡発掘調査報告 III | 財団法人鳥取県教育委員会
1981 |
| 18 | | 岡山県の文化財(二) | 岡山県教育委員会
1981 (昭56) |
| 19 | 末永 雅雄 | 増補日本上代の武器 | 1981 (昭56) |
| 20 | 川勝政太郎 | 新版石造美術 | 1981 (昭56) |
| 21 | 前田 義人 | 「こうしんのう1号古墳」 | 財団法人北九州教育委員会
1981 |
| 22 | 伊藤 晃他 | 「阿坂古墳」山陽自動車道建設に伴う発掘調査 2 | 建設省岡山県工事事務所
岡山県教育委員会
1981 |
| 23 | 森下 大輔 | 「社ノ上三草近世墓」加東郡埋蔵文化財ニュース | 加東郡教育委員会
1981 |
| 24 | 吉識 雅仁他 | 八鹿町円山川右岸道路建設にかかる夕置古墳群
・沢原古墳群発掘調査 | 昭和58年度発行予定 |
| 25 | 三村 修次 | 太子バイパス建設にかかる上太田1号墳発掘調査 | 太子町教育委員会
1981 |

Ⅳ ま と め

近畿自動車道舞鶴線の初年度の調査は、古墳1基と遺跡確認調査2か所と小規模であったが、古墳の調査に関しては、今回の調査を含めても10回とならないと思われる地域でもあり、意義の大きいものであった。

庄境2号墳は後期の群集墳とは言え、2基をもって一群となす古墳群であり、内部主体に横穴式石室を持つ。また、外部には2段の列石（一部に2段を成す）を巡らせる。

篠山盆地周辺部での群集墳のあり方は、他地域に比べて、多くの古墳でもって群集墳を形成するのは珍しく、3～7基で一つの群を形成する傾向にあるとの指摘もある。^{註1}

三田地方をも含めて周辺地域を見てみると、三田市末西の青野ダムAW-59号^{註2}—69号墳や、三田市末古墳^{註3}が2墳をもって1群を形成しており、庄境2号墳と1号墳同様、2基の古墳にあって大小の差異が認められる。共に内部主体は横穴式石室で、時期は6世紀末から7世紀初頭にかけてと考えられる。丹南町付近でも佐麓山・遊谷・西成山・味新塚・護摩ヶ谷などの群集墳が存在し、2～3基で1群を形成している。

列石については、庄境2号墳は一部に2段の列石を巡らせているが、下段の外部列石は盛土の内ではなく、上段のみ盛土の内に入る。他とは少し違う形をとっている。周辺地域の類例を見ると、前述の青野ダムAW・59号墳にも外部列石が存在し、庄境2号墳同様に一部に上段の列石を巡らせ2段となっている。また同じ青野ダム予定地内で、近年調査された古墳にも列石が残存していたと聞く。これら両古墳の列石は、比較的大きめの石が使われており、残存状態があまり良好とは言えない。

鉄器では前述のように、鉄鍔の鍔身と筥被の間に位置する凸状の突起の存在が問題であり、このようなあり方が筥被脇扶柳葉式と広鋒録筥被三角式の両形式の間になるものか、また、新しい形式になるのか、類例に乏しく今後の課題としておきたい。また、鍔に付着する木質は鑑定の結果、竹であった。

最後に古墳の時期について、横穴式石室墳でもあり、追葬が行われているのは事実であり、おおよそ3時期のあり方が、土器等から伺える。すなわち、6世紀後半～7世紀の初頭までであり、土器型式で言うところの、TK-43の時期が最初であり、次にTK-209^{註5}であり、最後にTK-217の頃と思われる。（吉田）

- | | | |
|----------------------------------|--------|------------|
| 註1 「古代祖先のあゆみ」 | 1980 | 篠山町教育委員会 |
| 註2 「三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報」 | 1978.3 | 兵庫県教育委員会 |
| 註3 昭和48年度に筆者らが調査を実施した古墳（未報文） | | |
| 註4 昭和57年度青野ダム予定地の調査員の方々に御教示を受けた。 | | |
| 註5 「陶器古墳址群」I | 1966 | 平安学園考古学クラブ |



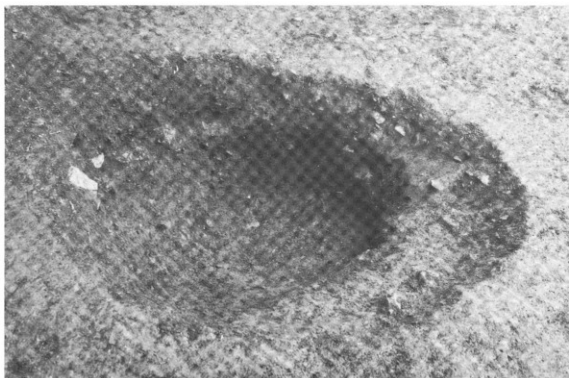
庄境2号墳遺跡(調査前)北より



庄境2号墳遺跡(調査前)南より



近世墓 (調査前)



近世墓 (調査後)



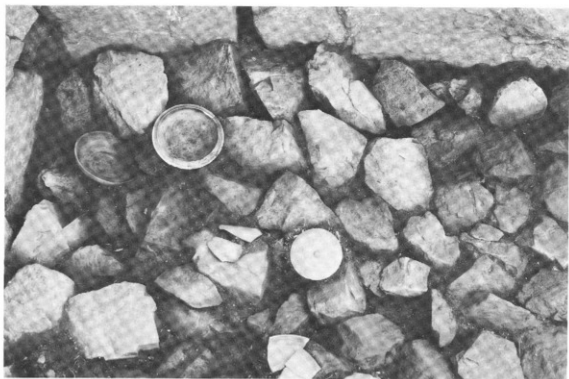
石室 (奥壁より)



石室 (深道部より)



床面遺物出土状況(中央部)



床面遺物出土状況(奥壁右)



床面遺物出土狀況(右側壁附近)



床面遺物出土狀況(圍塞石附近)



石室全景



石室全景(石敷除去後)



列石 (北東側)



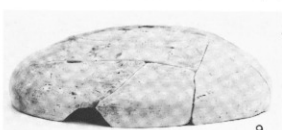
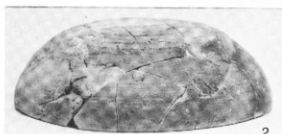
列石 (北側)

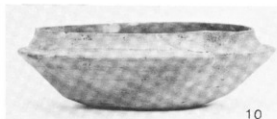


古墳全景(調査後)北より



古墳全景(調査後)東より





10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



103



39



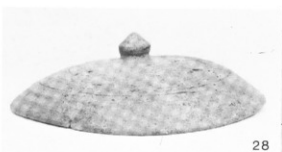
25



26



27



28



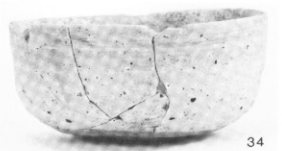
29



30



33



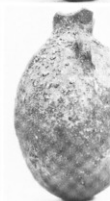
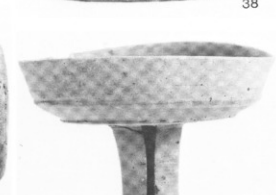
34

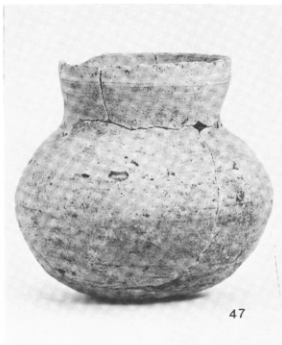
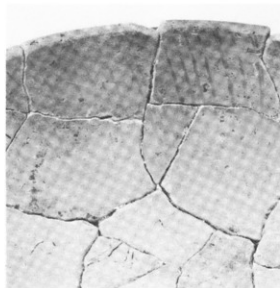


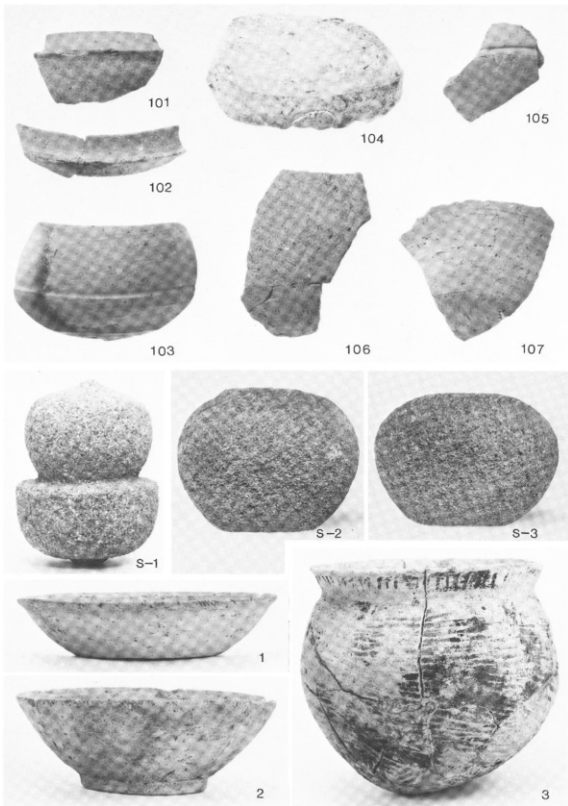
35

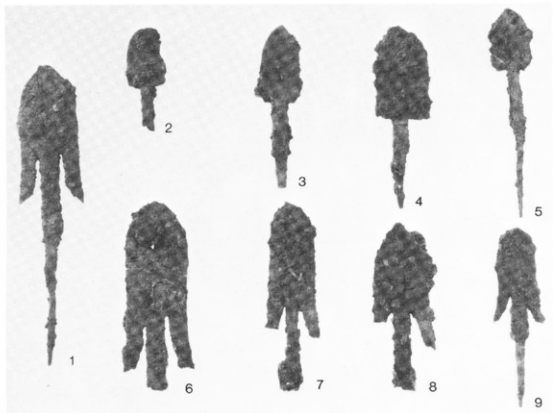


36

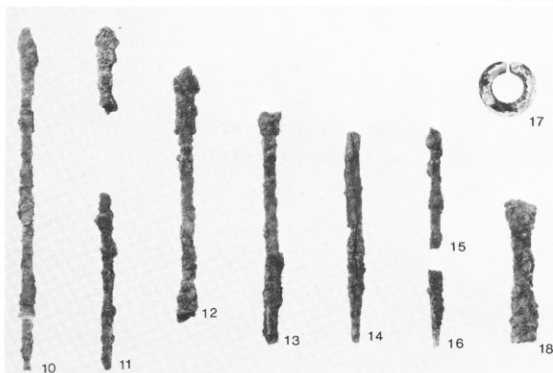








鉄器 (1)



鉄器 (2)

近畿自動車道関係埋蔵文化財
調査報告書(1)

昭和 58 年 3 月

発行 兵庫県教育委員会
印刷 三ヶ輪印刷工業株式会社